

アンケート調査による「職業観の形成」に関する研究

——生活体験による志望職業の変化について——

加澤 恒雄*・湯尾 慎一**

(平成23年9月15日受付)

A Study Based on Questionnaires regarding “the Forming of Individual View of Vocation”
—— About the Change of Individual View of a Desirable Vocation through Personal Life Experiences ——

Tsuneo KAZAWA and Shin-ichi YUO

(Received Sep. 15, 2011)

Abstract

We compared the desirable vocation at the age of the high school first grader with the future dream at the age of the sixth grader. We argued a difference of the student who maintained vocational hope and the student who changed vocational hope. We insist on the significance of the career education. We examined the career of an athlete in particular.

Key Words: view of vocation, desirable job, personal life experience, fruitful career education, freeter & NEET (Not in Employment, Education or Training), school curriculum, career mind

1. 緒言

本来、進路指導とは、児童生徒が自らの在り方や生き方を考え、将来に対する目的意識をもって、主体的に自己の進路を選択決定し、生涯にわたる自己実現を図っていくことができるような能力や態度を身に付けることができるよう、指導・援助することである。しかしながら、進路指導は、「進路決定の指導」に重点が置かれ、志望先の選択・決定等にかかる「出口指導」に終始しがちになっている状況が少なからず見受けられた。とくに中学校から高等学校への進学に際して、業者テストによる偏差値に過度に依存したものとなっているとの指摘がなされてきた。このため、文部省(当時)は、本来の進路指導に立ち返るよう、1993年2月、「高等学校入学者選抜について(通知)」において「中学校における進路指導の充実」や、「業者テストの偏差値を用いない入学者選抜の改善」を、都道府県教育委員会等に対し通知した。また、進路指導の改善の趣旨を徹底するため、都道府県教育委員会関係者等の会議や、中学校の

教員を対象とした研修会を開催するとともに、具体的な事例を記載した指導資料を作成した。

進路指導では、進路意識の向上や内面の発達に結び付いた指導が重要であり、豊かな人間性や社会性、学ぶことや働くことへの関心や意欲、進んで課題を見つけそれを追求していく力および集団生活に必要な規範意識、人間関係を築く力やコミュニケーション能力など、幅広い能力の形成を支援していくことが重要である。これらは、学校の教育活動全体を通じて計画的、組織的に行い、小学校段階から発達段階や特性に応じて指導援助しなければならない。

小学校におけるキャリア教育を文部科学省が提唱したのは、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(1999年12月)において、「小学校段階から発達段階に応じてキャリア教育を実施する必要がある」としたのが最初である。学校間の接続だけでなく、「学校教育と職業生活との接続」の改善も視野に入れたものであった。

2003年6月、文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣および経済財政政策担当大臣からなる「若者自立・挑戦

* 広島工業大学工学部機械システム工学科(教職科目担当)

** 芦屋大学臨床教育学部非常勤講師

戦略会議」において提言された「若者自立・挑戦プラン」では、キャリア教育の推進が位置付けられた。

初等中等教育におけるキャリア教育の在り方については、協力者会議を設置し、2004年1月に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」において、キャリア教育を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育」と定義し、「初等中等教育におけるキャリア教育の推進」を提言した。

文部科学省では、2004年度には小学校・中学校・高等学校を通じ、組織的・系統的なキャリア教育を行うための指導方法・指導内容の開発等を行う「キャリア教育推進地域指定事業」を実施した。2004年は、初等教育にキャリア教育が導入された元年といえる。

2005年度からは、11月を「キャリア・スタート・ウィーク」推進月間として、中学校において5日間の職場体験を行うように求めている。しかし、各学校の現状は、キャリア教育の必要性は理解されながらも、その意味付けや受け止め方が多様で、教育課程の見直し、体験活動等の取組が十分とは言えない状況である。

小学校では6年間を通して、キャリア教育を全教育活動を通じて、意図的・継続的に推進してゆかなければならない。低学年、中学年、高学年と成長が著しく、社会的自立・職業的自立に向けて、その基盤を形成する重要な時期である。そのため「キャリア教育推進の手引」を作成し、「キャリア教育」への理解を深めるとともに、各学校、家庭・保護者、地域が協力して、「生きる力」を児童が身に付け、将来、社会人・職業人として自立してゆくことができるよう、キャリア教育を一層推進・充実する必要がある。児童一人ひとりの発達に応じて、さまざまな体験活動を設定してゆくことが重要であり、係活動や委員会活動、清掃活動、勤労生産的な活動等を通して、役割分担の意義を体験させることが重要である。教職員や保護者、地域の大人には、「小学校は、勤労観、職業観の基盤形成の大切な時期であるということ」を常に意識してかかわっていくこと、「一人一人の子どもの心に寄り添い、理解に努めること」「共に夢を持って生きていくこと」などの姿勢が求められている。

これらを踏まえ、小学校段階における将来の夢と、高等学校1年生における希望職業の関係を調査検討する必要があると考え、アンケート調査を実施した。

2. 調査対象と実施方法

調査は、京都府下に所在する私立高等学校において、2004年4月、1年生207名を対象に行った。そのうち分けは、商業科109名（男子24名、女子85名）、普通科98名（男子33名、女子65名）であった。当該校はクラブ活動が盛ん

な高等学校であり、卒業生の8割が進学し、2割が就職している。職業に関するアンケートは、「小学校6年生のころの将来の夢は（ ）になることでした。いまは、将来、（ ）という職業につきたいと思っています」という形式で実施した。また、生活体験に関しては小学校時代および中学校時代に行った理科の実験をいくつ覚えているか（思い出せるか）を分析の対象とした。質問は「小学校のときにした理科の実験で覚えているものをすべて書いてください」および「中学校のときにした理科の実験で覚えているものをすべて書いてください」であった。

3. 結果

将来の希望する職業を小学校6年生のとき（回想）と、高校1年生（現在）とを比較し、維持した者および変更した者に分けて考察することにした。

表1は、希望する職業を、「維持」と「変更」と「無回答」に分けたものである。

表1 希望する職業の変化

	合計	男子	女子
維持	36	7	29
変更	116	28	88
無回答	55	22	33
合計	207	57	150

「維持」とは、小学校6年生のときと高等学校1年生で、希望する職業が変化していない者を指すが、より具体的に絞り込んだ者も、このカテゴリーに分類した。具体的に絞り込むとは、「動物関係の仕事」から「動物の医者」のように職種をより具体化した者である。

「変更」とは、小学校6年生のときと高等学校1年生で、希望する職業が変化した者である。このなかには、小学校6年生のときには希望職業がなかったが、高等学校1年生で希望職業をもっている者、および、逆に小学校6年生のときには希望職業があったが、高等学校1年生では希望職業がない者も含んでいる。

「無回答」とは、小学校6年生のときも高等学校1年生においても、希望する職業を示していない者である。

ここでは、希望職業を維持した36名（男子7名、女子29名）、および、希望職業を変更した116名（男子28名、女子88名）について論じる。

表2は、希望職業を維持した生徒のうち分けである。

「夢（スポーツ）」とは、男子はプロ野球選手2名、テニスプレーヤー、バスケットボール選手であった。女子はソフトボール選手2名、バスケットボール選手であった。

「夢（その他）」は漫画家であった。

「絞り込み」は、男子は車屋からエンジニアであり、女子

表2 希望職業を維持した生徒のうち分け

	合計	男子	女子
夢（スポーツ）	7	4	3
夢（その他）	2	0	2
絞り込み	3	1	2
その他	24	2	22
合計	36	7	29

は動物関連の仕事から獣医師，動物関連の仕事からトリマーであった。

「その他」は，堅実な仕事であった。

表3は，希望職業が変化した生徒のうち分けである。

表3 希望職業が変化した生徒のうち分け

	合計	男子	女子
関連	10	1	9
発散	1	0	1
異業種	53	13	40
有→無	33	12	21
無→有	19	2	17
合計	116	28	88
関連	4	1	3
異業種	9	6	3
有→無	7	5	2
合計	20	12	8

「関連」とは，何らかの関連のある職業に希望が変わった者である。たとえば，美容師からエステシャンに変わった生徒がいた。また，そのうちの「夢敗れ型」では，バスケットボール選手から体育の先生に希望が変わった生徒がいた。

「発散」とは，パティシエから飲食業へと，より広いカテゴリーに変化していた。

「異業種」とは，全く異なる業種に変化している者である。

「有→無」とは，小学校6年生のときには希望職業があったが，高等学校1年生で希望職業がない者を，「無→有」とは，その逆に小学校6年生のとき希望職業がなく，高等学校1年生で希望職業が示されている者である。

「夢敗れ型」とは，スポーツ選手を諦め，関連する職業や異業種を希望したり，高等学校1年生では希望職業を見出せていない者である。調査校はスポーツが盛んな学校であり，スポーツ選手を諦めた生徒が20名いた。

表4は，希望する職業の変化と，覚えている理科実験の回数の平均値を示したものである。生活体験の指標として，理科実験の回数を示した。福山（1995）は，生活体験を示す教科として，第1に家庭科を次に理科を挙げている。表5には，覚えている理科実験の回数の差の検定結果を示した。将来の希望を示さなかった生徒（無回答）と，

表4 希望する職業の変化と覚えている理科実験の回数

	平均	男子	女子
維持	3.44	3.86	3.34
変更	3.62	3.75	3.58
無回答	2.96	3.05	2.91
平均	3.41	3.49	3.38

表5 覚えている理科実験の回数の差の検定（t検定）

		男子	女子
維持と変更	人数	35	117
	平均	3.77	3.62
	標準偏差	3.49	2.54
無回答	人数	22	117
	平均	3.05	2.91
	標準偏差	3.50	2.54
p値		0.448	0.152

将来の希望を示した生徒（維持と変更）との間には，有意差は認められなかった。

4. 考察

本調査では，将来の希望を示した生徒と示さなかった生徒の間に生活体験の有意差が認められなかったため，本稿では，個々の生徒について定性的に分析することにした。

男子で維持した生徒のうち，4名は，スポーツ選手となることを考えていた。うち分けは，プロ野球選手2名，バスケット選手1名，テニス選手1名であった。このうち，プロ野球選手を希望していた2名には，インタビューする機会があった。引退後の生活について尋ねたところ，日雇い労働をすることであった。女子では，3名がスポーツ選手になることを考えていた。そのうち，ソフトボール選手は2名で，バスケットボール選手が1名であった。このうち，ソフトボール選手を希望していた生徒に，競技生活後はどうするのかを尋ねたところ，何も考えていないとのことであった。このような職業は「憧れ」の職業であり，小学校の段階では，自己理解が十分でなく表現することがあるが，高等学校1年生でスポーツ推薦などで強豪校に入学しており，自己理解をしたうえで職業選択をしていると言える。しかし，その全員がプロとして生活をしてゆけるわけではない。さらに引退がある。プロ野球では29歳，Jリーグ（プロサッカー）では26歳である。なお，ソフトボールやバスケットなどでは，引退年齢の公式記録を見つけないことができなかった。競技生活が終わった後の第2の人生の方が長いのである。本調査は，2004年に高等学校1年生に対して行われたので，小学校にキャリア教育が導入される以前の問題であるが，インタビューした数名の生徒が全員，第2の人生についての見通しをもっていない

かったことは、キャリア教育の観点から問題があると考えられる。杉原輝男が74歳で現役のプロゴルファーであるような競技を除いては、児童生徒の夢を潰さない形でのキャリア教育が可能であると考えられる。キャリア教育において、「なれなかったらどうする?」という指導であれば、児童生徒の夢を潰すのであまり好ましくないと考える。しかし、キャリア教育を「競技生活終了後の第2の人生はどうしようか?」と問いかけるのである。このようにすることで、児童生徒の夢を潰すことなく、選手以外の職業選択の機会をつくることができる。

先日、伊良部秀輝氏が自殺した。享年42歳であった。高卒でプロ野球選手となり、さらにはメジャーリーグでもワールドチャンピオンとなった超一流の選手であった。報道によれば、自殺の理由は必ずしも明らかではないが、このようなことにならないように、他の職業にも目を向けることができるような柔軟な「生き方教育」としてのキャリア教育が大切であると言えよう。

夢の職業で維持できていた生徒の問題点が明らかになったので、次に、変更した「夢敗れ型」について分析する。希望職業を変更した生徒のうち、「夢破れ型」の生徒は、キャリアについてよく考えているように推察され、関連した職業を選択している。男子の「夢敗れ型」12名のうち、7名はプロ野球選手、3名はサッカー選手、1名はアイスホッケー選手、1名はスポーツ選手と記入していた。このうち、スポーツ関係の仕事を希望していた生徒は、サッカー選手を希望していた生徒のうちの1名と野球選手を希望していた1名である。このうち、野球選手を希望していた生徒は、「整体師」と具体的な職業名を挙げていた。高校1年生では職業が未定であったのは5名であり、野球選手を希望していた4名と、サッカー選手を希望していた1名であった。あとの5名は全く異なる職業を希望しており、トラック運転手(アイスホッケー選手)、星の関係の仕事(サッカー選手)、大工(スポーツ選手)、ショップ店員(プロ野球選手)、ゲーム関係の仕事(プロ野球選手)であった。

女子の「夢敗れ型」13名のうち、スポーツ選手は7名であった。そのうち、関連した職種を選んでいったのは、ソフトボール関係の仕事(ソフトボール選手)、体育の先生(バスケット選手)の3名であった。関連のない職種を選んだのは、保母さん(ソフトボール選手)、社長(バレー選手)、工芸関係の仕事(卓球選手)の2名であった。また、高等学校1年生で希望職種を決めていない生徒が2名いた。

スポーツ選手以外で「夢敗れ型」であったのは6名であった。そのうち、関連した職種を選んでいったのはピアノの先生(ピアニスト)であった。また、関連していない仕事を選んだのは、パティシエ(歌手)、看護婦(歌手)、看

護婦(芸能人)、保育士(タレント)、美容関係の仕事(有名人)であった。スポーツ選手以外の夢敗れ型では、希望職業未決定者はいなかった。

これらの「夢敗れ型」の生徒は、高等学校の従来型の進路指導でも、他の職業を考える機会が与えられると考えられる。夢に破れたことによって、探索的に職業を考える機会を与えられたといえる。

従来型の進路指導では、探索的に職業を考える機会を得ることができず、また、キャリア教育を実施しても他に目が向かないであろうと考えられるのは、一般的な職業を維持した生徒であると考えられる。一般的な職業を維持した生徒は、その職業に向けた進路指導が行われる。したがって、他の職業について知る機会を与えられない。

また、スポーツ選手以外の夢の職業を維持した例では、2名の女子が漫画家、1名が歌手と書いていた。従来型の進路指導では、他の職業の可能性について指導するのは、難しいと言えよう。

男子では、3名が一般的な職業を維持している。維持した生徒のうち1名は、「車屋」から「エンジニア」に具体化しているので、職業観の発達があったと考えられる。しかし、問題なのは、「建築士」と書いた生徒と、「モーター関係」と書いた生徒である。これは、職業観がまったく変化していないと考えることができる。

女子で一般的な職業を選んだ生徒のうち、職業観が具体化した維持といえるのは、獣医(動物関係の仕事)とトリマー(動物関係の仕事)と書いていた2名である。また、小学校6年生と高等学校1年生で希望職業がまったく変化しなかったのは、21名であり、美容師5名、保育士5名、看護師2名、幼稚園教諭1名、介護福祉士1名、カメラマン1名、デザイナー1名、パティシエ1名、フラワーデザイナー1名、ヘアメイク1名、ペットショップ1名、メイクアップアーティスト1名であった。職業観の成長がない可能性がある、と言えよう。

キャリア教育において、職業体験はインターンシップとしての意味だけでなく、「職業を知る」ことに意義がある。ベネッセ教育研究開発センターの第1回子ども生活実態基本調査報告書によると、「なりたい職業ランキング」は、高校生男子は表6、女子は表7のようになっている。男女とも、1位は「学校の先生」である。これは、職業を知らないことに原因があると言えよう。10位までの職業は、子どもたちにとって、活躍している場面を見る機会の多い職種であることがわかる。知らない職業がなりたい職業になることはありえないので、とくに中学までのキャリア教育においては、多様な職業があるという観点から、実際に就く職業とは関係なく、職場体験をする機会があることが大切であると考えられる。

表6 なりたい職業ランキング 高校男子

1位	学校の先生
2位	公務員
3位	医師
4位	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士
5位	薬剤師
6位	警察官
7位	研究員・大学教員
8位	技術者・エンジニア・整備士
9位	法律家（弁護士・裁判官・検察官）
10位	消防士（レスキュー・救急救命士）

表7 なりたい職業ランキング 高校女子

1位	学校の先生
2位	保育士・幼稚園の先生
3位	看護師
4位	薬剤師
5位	理学療法士・臨床検査技師・歯科衛生士
6位	公務員
7位	医師
8位	栄養士
9位	介護福祉士・ホームヘルパー
10位	カウンセラー・臨床心理士

高校生のなりたい職業ランキングからは、高校生が職業についての知識が乏しいことが読みとれる。

高校生になると、実際に卒業後すぐに就職したり、就職を見据えて上級学校を選んだりするので、実際にその職業に就くことを考慮したインターンシップ体験が必要である。看護専門学校のオープンキャンパスでは、参加したことによって、進学を断念するケースが散見される。自分には向かない職業であることを認識し、進路変更をするのである。看護専門学校では、入学後に進路変更するよりは、オープンキャンパスの段階での自己理解に基づく進路変更の方が望ましい、と考えている。

つまり、自己理解と職業理解によって希望職業を変更することは、職業観の発達と捉えることができる。

男子で希望職業を変更したものは、ゲームプログラマー（あとつぎ）、コンピュータプログラマー（映画監督）、調理師（動物の調教師）、パイロット（警官）などがあつた。女子では、美容師（保育士）が3名、トリマー（美容師）が2名、保育士（ピアノの先生）が2名、保育士（幼稚園の先生）、中学校の体育の先生（幼稚園の先生）などであつた。職業情報や自己理解の結果、変更があつたものと考えられる。

希望職業が小学校6年生ではなく、高校1年生であるものについては、男子は、2名がコンピュータ関連の仕事を書いていた。女子では、保育士3名、幼稚園の先生2名、教師、臨床工学技師、病理医、美容関係などであつた。

職業理解や自己理解の結果、職業を選択できるように

なつたと考えられる。

小学校6年生のとき希望職業があり、高校1年生では書いていなかった生徒では、男子では車の整備士、コンビニ店長、大工、販売員などであつた。女子では、保育士7名、美容師3名、看護師2名、先生2名などであつた。

自己理解や職業理解の結果、その職業に就くことを控えるという選択をし、新たに探索することになつたと考えられる。

このように、職業を変更したり、職業を選択したり、不適格に気づき探索することは、職業観が発達したと考えることができる。

両方に職業を書いていなかった55名については、職業観の発達もなく、職業に関する意識もないという大きな問題を抱えてると考えられる。

調査校では、プロスポーツを目指す生徒が少なからず存在し、インタビューした数名の生徒は、引退後について考えていなかったため、競技生活後について考察の必要があると考え、調査校で希望があつた競技について調べたところ、Jリーグには、セカンドキャリアのサポートをしているJリーグキャリアサポートセンター（CSC）があつた。

2008年のシーズン終了後、162名の選手が所属クラブから登録を抹消された。そのうち、67名が日本フットボールリーグ（JFL）や地域リーグへ移籍した。最近では、引退後の進路として大学進学を選ぶケースが増えており、11名が修学した。高卒でプロ入りし、2年で選手登録を抹消され、2009年に大学に入学した選手の例では、高等学校時代は全国大会の経験がなく、入団テストを受けてJ2のクラブに入団したが、1年目の出場は1試合、2年目は故障のため出場機会がなく、オフに契約更新しないと通告された。就職の当てもなく、Jリーグのトライアウトに参加したところ、大学のスタッフの目に留まり、面接と実技の入試を経て進学が決まった。CSCを通じてトライアウト見学する大学が増えてきている。とくに、社会人として実力も備わっていないと考えているときに、2年遅れの大学進学は、本人にとっては良い選択であつたと考えられる。

また、高い評価で高卒でプロ入りしても、期待に応えられない選手は少なくない。プロで出場機会に恵まれなかった場合、大学を経てプロに入った選手と評価が逆転することもある。プロで試合に出場できなかった選手は、大学で試合経験を積んだ選手に、実戦経験で負けてしまうのである。前出の選手は、大学卒業後もう一度プロにチャレンジしたいと考えている。

5. 結 語

小学校6年生のときの希望職業と、高等学校1年生現在の希望職業を比較して、変更があつた生徒に関しては、

職業観の発達があり、職業に関する現実的な自覚もあり、望ましい発達をしていると考えられる。維持した生徒に関しては、職業に関する意識はあるが、職業観の発達は少なかったと考えられる。希望職業を書かなかった生徒は、職業に関する意識が希薄で、職業観の発達もなかったと考えられる。

今回は、2004年の高等学校1年生に対する調査であるので、小学生に対するキャリア教育が不十分であったときのデータであるが、「生き方在り方教育」としてのキャリア教育を先送りせずに実施していくことが、人生をより良く生きる糧となると言えよう。

文 献

〈著書〉

- 1 福山重一 職業指導研究 24版 文雅堂銀行研究社、1995年
- 2 吉田辰雄編『21世紀の進路指導事典』ブレーン出版、2001年
- 3 柴山茂夫、加澤恒雄・他共著『キャリアガイダンス—進路選択の心理と指導—』学術図書出版社、2003年
- 4 加澤恒雄、広岡義之編著『生徒指導・進路指導の理論と実践』ミネルヴァ書房、2007年

〈論文〉

- 1 西田泰和、中学校における勤労体験学習と職業指導『芦屋大学25周年記念論文集』文雅堂銀行研究社 1988年
- 2 加澤恒雄「フリーター」の功罪論—現代の進路指導論からみたフリーター問題—『広島工業大学研究紀要』第35巻 2001年
- 3 加澤恒雄「インターンシップ経験から最高の成果を獲得するための心得」『広島工業大学研究紀要』第37巻 2003年
- 4 加澤恒雄「現代日本における大学教育のパラダイム転換の必要性に関する考察—大学教育の中核としてのキャリア教育論」広島大学高等教育研究開発センター

- 『大学論集』第37集 2005年
- 5 湯尾慎一、吉田隆夫、山田理恵子共著 高等学校生徒の生活体験に関する数量化研究—指数化で明らかになった生活体験の不足—『芦屋大学論叢』第43号 2006年
 - 6 湯尾慎一、湯尾啓子、吉田隆夫共著 高等学校女子生徒の体験構造の考察—生徒指導および進路指導の視点からの生活体験の評価—『芦屋大学論叢』第45号 2007年
 - 7 吉田隆夫、湯尾慎一、湯尾啓子共著 学年進行にともなう生活体験構造の変化—進路（職業）指導の視点からの報告—『芦屋大学論叢』第47号 2007年
 - 8 加澤恒雄、井上仁志共著 特別活動におけるキャリア教育に関する教育方法の実践的開発、『広島工業大学研究紀要』第45巻 2011年

〈ホームページ〉

- 1 文部科学省、小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—第4章各学校段階におけるキャリア教育 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/06122006/004.htm (2006年) 2011年7月18日確認
- 2 日本プロ野球選手会公式ホームページ <http://jpbpa.net/transfer/?id=1285571669-687883> 2011年8月10日確認
- 3 Jリーグ公式サイト Jリーグキャリアサポートセンター (CSC) <http://www.j-league.or.jp/csc/topic/> 2011年8月10日確認
- 4 JPFA 日本プロサッカー選手会 セカンドキャリア問題 <http://www.j-pfa.or.jp/activity/second-career> 2011年8月10日確認
- 5 ベネッセ教育研究開発センター になりたい職業ランキング 高校生男子編 http://www.value-gap.com/2006/10/post_80.html 2011年8月10日確認
- 6 ベネッセ教育研究開発センター になりたい職業ランキング 高校生女子編 http://www.value-gap.com/2006/10/post_79.html 2011年8月10日確認